

## Localでいこう！

### はじめに

このアングルには2年9か月ぶりの登場になりますが、実は今年3月に『調査研究情報誌 E C P R 財団設立40周年記念号（特集テーマ…これからの地域課題に對する政策提言）』Volume 38に、「観光政策の担い手と新しい連携」を寄稿しました。概略を申し上げれば、観光まちづくりとは何かを示した上で、観光政策がなぜ必要で、これからは誰が誰とどのように政策形成をしていくのかについて述べています。また、隣人や異業種との連携や、移住と観光の接合などについても触れています。今回のテーマと近い内容なので、ぜひこちらもご覧いただくことをお勧めしながら、3つの切り口で話を進めていきます。なおこの論文を本文中で扱う場合には、E C P R 38号の何ページと記します。

米田誠司（2017）「観光政策の担い手と新しい連携」  
<http://www.ecpr.or.jp/pdf/ecpr38/43-50.pdf>

### 1. 資源は足もとに

観光でも交流でも、まず大切なのは資源です。誰かに来てもらおうとか、交流してみようという時に、資源こそが出発点になります。

#### 足もとを観察する

地域を歩いてみると、「うちには何でもある」という自信あふれる意見から、「うちには何も無い」という半ばあきらめの意見まで、さまざまな意見を聞きまます。この両極端に聞こえる意見の間に、地域のいろんな実情や可能性があるのだと思います。でもここにしかないものという時、私たちはこれまで、足もとにあるものをいねいに探してきたでしょうか。あるいは、今の時代にはなくなってしまうことであっても、ずっと大切に思ってきたでしょうか。そこで図1のよう、地域資源を観光・交流資源まで変化させる5つのステップを紹介したいと思います。

### 5つのステップ

まず第一に、資源の探し方、見つけ方ですが、地域に普通にあるものごとを注ぎ深く観察することから始めましょう。その際、こんなものは資源にならないという先入観に囚われないように、そして感性と感度を豊かに見つけることが大切です。

第二に、見つけた資源を磨かなければなりません。ここまではよく言われることですが、でも磨く際には資源を全部ピカピカにしようと思わずに、そのものが本来持っている本質を損なわないようにしながら、光っているよい面だけを美しく磨き出していきましょう。

第三に、磨いた資源がどのように見えるのかを考えてみましょう。あくまで客体である観光客、来訪者から見て、どのように見えるのかを客観的に考えるのです。

そして第四が、資源の見せ方です。先に見え方は確認しているので、それぞれの時代背景をベースに、また来たるべき



愛媛大学  
米田 誠司

時代も読みながら、どのように表現するのか、どういうメッセージを乗せるのかを考えてみましょう。

最後のステップは、資源を見立てるということです。千利休が言うように「物を本来のあるべき姿ではなく、別の物として見る」ということは、とても難しいことですが、でも暮らしのものごとを新

図1 地域資源を観光・交流資源まで変化させる5つのステップ（筆者作成）

見つけ方	地域に普通にあるものごとを注意深く観察する。先入観に囚われずに、感性・感度を豊かに。
磨き方	資源そのものが本来持っている本質を損なわないように、光っているよい面を美しく磨き出す。
見え方	客体である観光客・来訪者から見て、どのように見えるのかを客観的に考えてみる。
見せ方	それぞれの時代背景をベースに、来たるべき時代を読みつつ、どのように表現しメッセージを乗せるか。
見立て方	見立て方：「物を本来のあるべき姿ではなく、別の物として見る」（千利休）→暮らしのものごとの再評価。

しい価値観で再評価するというのは、いまの時代にこそ大切な作業になります。

## 日常をどう磨くか

たとえば、古民家の再生では、よい物件を見つけ、再生のための磨く作業も大事ですが、一番大事なのは、これからの時代を読んで空間を見立てること、つまりリノベーションの姿勢だと思えます。また身近なところでは、日本の居酒屋は仲間と談笑しながら料理とお酒を楽しめるところですが、実はこれは世界的にみて珍しい飲食形態です。とすれば、インバウンド観光客を迎える上で、外国人からどう見えるかを意識しつつ、それぞれの地域で忘れられていた食文化を探して、磨いて、商品にしていく、このようなことも必要となるでしょう。

ということは、非日常を売りにしてきた観光だけを意識するのではなく、いかに足もとにある日常をどう磨いていくかということが大切になってきます。E C P R 38号の47ページで触れています。こうした日常が観光を支え、地域の多様性が観光に深みと価値を与えるのだと思うのです。

## 2. 担い手は全員

では誰が今後そうしたことの担い手になっていけばよいのでしょうか。先に答

えをいえば、それは地域のみなさん全員です。

## プロという領分

ただ、こと観光となると、プロとアマチュアの領分には大きな隔りがあります。たとえば、旅館というビジネスは、資金調達して大きな投資で先に建物を造って、それから多くの従業員を雇い、24時間営業でお客さまの命を預かりながら満足してもらうものです。こうしたプロの領分は、そうそうまねできるものではありません。でもこれからの時代に、そうした旅館のサービスだけでお客さまを満足させることができるかといえば、そうではないのも事実です。宿泊客は旅館を出てまちを歩くわけですし、地域の魅力が大切であることは多くの方が指摘しているところです。

そう考えると、観光のプロである旅館が、他の観光のプロである土産品店や飲食店と連携することは必須ですし、さらには観光のプロではないけれども、さまざまな業種のプロと連携することも大切です。でもさらにいえば、環境の整備や風景の保全などとなると、もはや観光のアマチュアではあるが地域で暮らすことのプロである住民と組むしかないのです。あるいは旅館がアマチュアの一人として地域で動く方法もあるでしょう。

### プロとアマチュアの連携

一方で、地域のみなさんが担い手だといっても、やはりお客さまに満足していただく以上は、お客さまから発想してサービスを組み立てていくもてなしの心得など、プロから学ぶべきこともたくさんあると思うのです。また観光では、お客さまが遠くからやってきて、温泉、グルメ、宿泊などの何らかのサービスを期待し、それを享受してその対価を払います。このように金銭のやり取りを伴うのが観光という仕組みです。これに対して、金銭のやり取りが必ずしも必要でないとされてきたのが交流でしたが、これからの地域のあり方を考えると、観光とはいえないものの、金銭のやり取りを伴うことで維持できる交流の仕組みもあるはずです。

さらに言えば、実はここへきてプロとアマチュアの境目が見えにくくなる、あるいは両者が近づいている部分が増えていきます。たとえば、まちあるきガイドなどもそうですし、コミュニティで運営するカフェなども増えてきました。ということは、E C P R 38号の50ページで触れているように、フラットに近い関係性の中から何かが生まれてくる、あるいは一定の金銭もやり取りする領域にプロとアマチュアの両方からアプローチし、双方がスキルを学びながら取り組みを洗練させ、地域づくりにつなげていくことも必要

要ではないかと考えています。

### おおいたツーリズム大学の実践

そこで、今年度で11年目を迎える「おおいたツーリズム大学」について紹介してみたいと思います。これは、大分県庁が主催するツーリズム人材の育成塾で、私は2011年度からチューターとして関わっています。でも受講生のうち観光関係者は実は少数で、

農林漁業の従事者や鉱工業、サービス業に携わる方、地域おこし協力隊員や、中には僧侶や神官も地域のキーマンとして学びに来ており、毎年30名前後の修了生を輩出してきました。講座は座学をベースにしながらも、各地域に出向いてグループワークを徹底し、修了式では自分自身の行動計画を模造紙にまとめて、大分県知事と西村幸夫学長の前でプレゼンテーションしてもらいます。

たとえば、昨年度修了した佐伯市蒲江で緋扇貝の養殖をしている後藤猛

(35歳)さんは、人口16人の屋形島にゲストハウスをつくることを図2のように宣言しました。さつそく今春からツ大生(こう呼んでます)の同期が写真3のように掃除に駆けつけ、早ければ今秋に定員5名の宿が開業します。でも後藤さんは、いまはやりのゲストハウスを立ち上

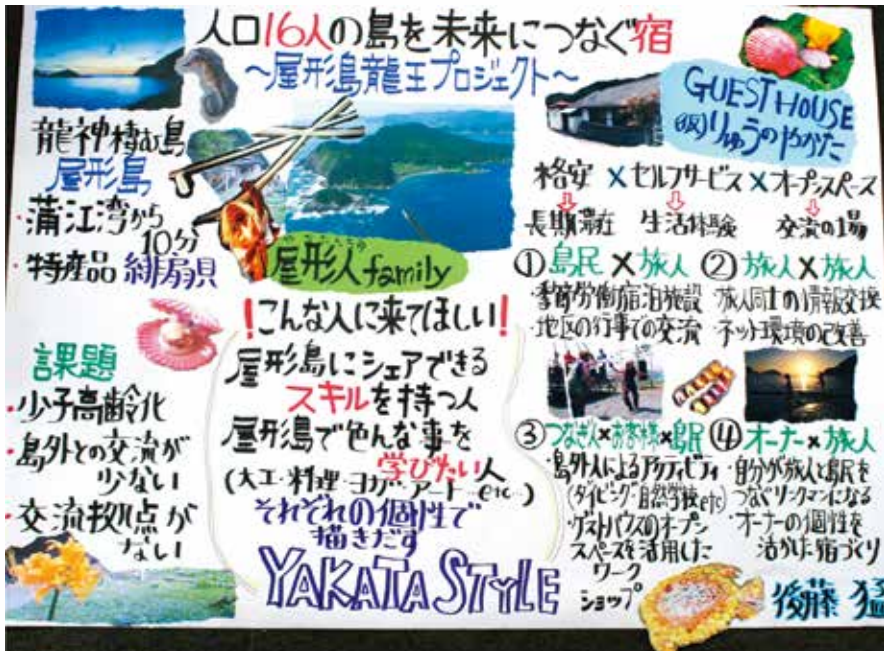


図2 おおいたツーリズム大学での後藤猛氏プレゼンテーション(出典:後藤猛氏)

げたいのではなく、屋形島の歴史、文化、暮らしなどの良い面と悪い面の両方を見せ、そして屋形島と向き合えるコアなファンを開拓し長く付き合っていきたいと考えているのです。



写真3 屋形島ゲストハウス開設のためにツ大同級生が協力  
(出典:後藤猛氏)

### 3. Locaieでいっしょ

では最後に、Locaieにどのようなこだわり、実践していけばよいのかについてみていきたいと思います。ここでは、あまり観光地といわれにくい地域で考えてみましょう。

#### 中心的な価値は何か

前にご紹介した5つのステップで、地域で愛でるべき資源を見つけて、磨いて、担い手もそろそろ出揃ってきたとしましょう。その段階ですべきことは、ECP R 38号の46ページに詳しく述べていますが、一度立ち止まって、自分たちの地域の中心的な価値は何かについてじっくりとするとことん議論することです。ここさえしつかりできれば、後はいかようにでも展開できます。

#### 合言葉はMIG

そして次に行うべきことの合言葉はMIGです。地図Mapをつくり、インフォメーションInformationを整え、そしてまちあるきガイドGuideを始めましょう。観光地ではないとしても、地図は来訪者にとって何より便利ですし、地域の側でも認識を揃える目的もあります。たとえば、ある場所を探している時に誰かに描いてもらう地図は人によってさまざまです。空間認識は人によって異なるので、それをまず揃えるのです。その上で自分たちが調べて磨いてきた資源を地図に落とし込みましょう。しかも地図は一回作ったら完成ではなくて、更新していくたびによいものになります。地域にはたいがいイラストが得意な人がいますので協力してもらい

ましょう。まずはB4サイズかA3サイズの単色コピーできる程度から始めればよいと思います。

地図ができた次はインフォメーションの開設です。ただこれも観光地ではありませんので、引き受けてくれる酒屋さんとか、世話好きなお家の方とかに、たとえば一ヶ月単位でもいいので、インフォメーションのiの字の看板を出してもらって、地図を置き、簡単な受け答えをしてもらえば十分だと思います。

#### ガイドを通じて伝わる地域の資源

最後はまちあるきガイドです。これはややハードルは高いのですが、定期でも不定期でもよいので、先ほどのインフォメーションに集合してもらい、地図を片手にガイドが地域で自慢できるもの、ぜひ見てほしいものを順に案内しましょう。スキルアップやガイド養成の講座もいずれば必要になります。大事なのは、お客さまの立場に立ちつつ、それぞれのガイドの人とつながりにじみ出る案内を心がけて下さい。その際決して無料にせず、きちんとした料金設定をすることで、お客さまもガイドも真剣に取り組むことができます。少しずつ稼ごうとから交流事業を育てていけば、ガイドを通じて知る地域の奥深さや、ガイドそのものが印象深い資源となり、やがてはピートのきつかけにつながっていくことでしょう。

### 滞在で地域に巻き込む

そして、地域に旅館やホテルがあればぜひ連携すればよいのですが、もし旅館やホテルがなくてもあっても、地域で滞在できる方法を考えてみましょう。さきほどのようなゲストハウスや、農山漁村であればグリーンツーリズムという方法もあります。ただ大事なことは、当初から1泊でなく、滞在できることを想定して準備を始めることです。1泊であれば従来の観光のように対応しなければなりません。中長期の滞在となれば、体験メニューを用意しながらも、地域の暮らしの中に巻き込んでいけばよいのです。

### 体験 Experience を用意する

そこでこの体験メニューですが、自分たちで調べてきたことや磨いてきた資源を生かして、他の地域ではまねできない、ここだけの体験メニューに仕上げたいと思います。これはいわゆる着地型商品という程度のものでなく、苦労して掘り起こし磨きあげてきた地域の資源をもとに、ここにしかない、そして何よりも洗練されて得がたい体験 Experience が用意できるか、このことにかかっているのだと思います。そこで E C P R 38号の47ページで紹介した一般社団法人雪国観光圏での取り組

みの中から、さらに一例、「雪国ガストロノミーツーリズム」と呼ばれるものを紹介したいと思います。雪国として大切にしてきた食文化を背景として、観光客はフィールドに出かけて、里山の恵みを地元の人と一緒に採り、写真4のように一緒に料理をつくり、そして味わうのです。ここで味わう料理はひと時のものですが、それは貴重な Experience になるはず。どうでしょう、これは一つの事例ですが、みなさんの足もとからこのように発想すれば、Local というものは地域それぞれに、さまざまに積み上げていけるのではないのでしょうか。



写真4 雪国ガストロノミーツーリズムでの調理風景  
(出典：一般社団法人雪国観光圏)

そして、Local の対義語の一つは Global になります。おそらくこうして生み出された Local というものが Global に通用し、やがては地域のブランディングの核になる可能性があるものだと思います。

### おわりに

さて、Local なことをやろうとすると、このところどうしても地域では横並びになりがちです。たとえば、日本全国の農山漁村でピザ窯がはやっています。それはそれで活用すればよいのですが、でも横並びから一歩抜け出して、地域の仲間と悩んで、悩んで Unique なことを見つけ出しましょう。Unique の意味を辞書で調べてみると、特有なという意味の前に、すばらしい、格別の、類まれな、唯一の、二つとないという意味が並んでいます。私たちがこれから目指すべきはここではないでしょうか。

ここにしかないものが一つまた一つとそれぞれの地域で花開いてきた時に、地域の多様性が観光と交流に深みと価値を与えるのだと、あらためて思うのです。